

## 昔話が語る若者の姿

小澤俊夫

ご紹介いただいた小澤俊夫です。

貴重な時間ですから、いきなり本題に入りますね。初め、僕の方から一つ質問させてもらいたいんだけど「昔話はどこにありますか」って僕が聞いたら、皆さん、何を思い浮かべますか。「昔話って、どこにあるんですか」って言ったら……。

絵本に書いてある、そう思うかもしれないね。あるいは、昔話集に書いてあると思うかもしれない。あるいは、時々テレビに出てきますと思うかもしれない。だけど、われわれ、田舎へ行って、おじいちゃん、おばあちゃんからたくさん昔話を聞いてきた人間からすると、昔話が本当にあるのは、それが語られている時間の間だけなんです。昔話は語られている時間の中にだけ存在する。これ、一番基本の大事なことですので、ぜひ覚えておいてください。昔話は語られている時間の中にだけ存在する。っていうことは、終わったら消えちゃうということです。だから、時間に乗った文芸であるということが言えるでしょう。時間に乗った文芸。10分なら10分の間にだけある文芸。

なぜ、そんなことをわざわざ言うかという、恐らく皆さん、昔話というと、本で読んでもらうと思うんだよね。絵本で読んだり……。今、ほとんど本で読んでもらうでしょう。本で読むっていうのは、わからなかったら戻ってもいいよね。2、3ページ戻って読むこともできる。あるいは、文学のことを考えてください。小説。例えば100ページの本を20ページぐらい読んで、何だかわかんなくなったら、戻って読みゃあいいよね。それができるでしょ。ですから、書く方、作家の方は、どんな細かいことでも書けるんです。ちょっとした心の動きとか風景とか、いろいろ書けるわけですね。それを書くのが作家の腕というふうに言われるわけ。

昔話は、語り始めたら、さあっといっちゃいます。戻るわけにいきません。そうでしょ。待ってくれっていうわけにいかないわけです。すうっといっちゃいます。だから、語る方はとてもシンプルに語るんです。昔話の文体は、シンプルでクリア

であるということになります。単純明快である。それが言いたいんです。昔話が語られた時間の間にだけあるっていうことは、その結果生まれた語り・文体は簡単明瞭であるということ、それを知ってもらいたいんです。簡単明瞭である。

例えばグリム童話でもいいし、日本昔話でもいいですが、ちょっと思い出してみてください。日本の昔話といえば、山奥へ入っていきましてっていうやつか、川で洗濯してました、それだけだよ。どんな川とか言っていないでしょう。川幅がどのくらいだったか、川の流れは速かったのか遅かったのか、そんなこと何も言っていないよ。おばあさんは川で洗濯してました、それだけです。川ってことしか言わない。例えばグリム童話で言えば、「暗い森がありました」ですね。「大きな森に入っていました」、それだけです。「お菓子の家が1軒ありました」、それだけだ。お菓子の家がどういうお菓子だか、何も言っていないよ。つまり、シンプルでクリアなんです。それが大事なことなんです。シンプルでクリアだから、描写しません。昔話は写実的な文学ではない。今言った、川がどういう川だったか写実しない。山奥といっても、どんな木があるんだかっていう写実を語らない。それが昔話です。

ですから、いろんな出来事も、実に簡単です。例えば「手なしむすめ」なんていう話があります。これは日本にもあるし、『グリム童話』にもあるんですけども、継子が両手を切られて、子どもを背負わされて追い出されるんです。「両手を切られて子どもを背負って、とぼとぼと歩いていきました」……おかしいんじゃない？ 両手切られたら出血多量でひっくり返るはずだよ。歩いてるはずないでしょ。だけど、平気で歩いていきます。そして、暑い日だったもんだから、喉が渴いて、水を飲もうと思った。両手がないから水をしゃくって飲むことができない。それで、小川にかがみ込んで水を飲もうとしたら、背中の子どものがずるっとずり落ちそうになった。あっと思ったら、手がばあんと出て、子どもを抱きとめたっていうんです。治るときも、あっと思ったら瞬間に全部戻ります。100パーセント形が戻ります。そして機能も100パーセント戻ります。手が出て、すぐ抱けます。「手が出たけど、しばらく三角巾でつついた」なんてことはない。昔話ではそうなんです。それから、腕を切ったなんていいですけど、血が流れたなんて絶対に言いません。平気で歩いていきます。それが昔話。おとぎ話って、そうやってできてるんです。一言で言えば、おとぎ話は抽象的な文学であるということになるよ。抽象的な文学である。写実的な文学ではない。

だから、このことはすぐこういう問題につながっていきます。このごろ、「昔話は残酷だから、子どもに聞かせない方がいい」という意見がとて強くなりました。

特に日本ではそれが強いんです。残酷だから子どもに聞かせない方がいい。だけど、それは誤解です。腕を切るという残酷な事件は語ります。だけど、決して残虐には語ってない。血なまぐさくは語らない。それが昔話です。昔話は、残酷な出来事は語る、しかし、残虐には語らない。違いはわかるでしょ。「残虐に」っていうのは、血なまぐさくてリアルだけど、そうは語らないということです。それが誤解されているために、「昔話は残酷だから、子どもに聞かせない方がいい」という意見がとも強くなりました。そして、そのときにこういうふう言うんです。子どものときに残酷な話を聞かせると、大人になって残酷な人間になるから、聞かせない方がいいって言うんです。それも全くでたらめです。うそです、それは。どうでしょうか。日本の昔話って、ほとんどみんな残酷な話です。『グリム童話』も8割方の話に、腕切ったの、首切ったのっていう話が出てきます。だけど、そういう話を子どものころ聞いて育った人が、大人になって残酷になるかといったら、なりません。それは関係ないです。考えてみてください。日本の昔話は全部そういうふうに残酷なことを語ってます。日本の子どもはみんな、そうやって育ってきました。日本の子どもっていうことは、皆さんのおじいちゃん、おばあちゃん、あるいはひいおじいちゃん、おばあちゃん、そのぐらいの年齢の人。みんな、そういう話を聞いて育ってきました。ですけど、今、残酷な人間になってますか、皆さんのおじいちゃん、おばあちゃんは。なってないでしょう。なってないですよ、それはね。もし本当になるんだったら、日本中、残酷な人間で満ちあふれているはずですよ。そんなことはない。ですから、どうぞ心配しないでください。昔話は、残酷な事件は語るけど、血なまぐさくは語らない。安心して語ったらいいです。

じゃあ、どうして、昔話の中に残酷な事件が出てくるかっていうと、こういうことなんですよ。ほとんどの話において、途中では残酷な事件が出てきます。だけど、話の最後では主人公は幸せに至ります。だから、こういうふうに見えるんです。昔話の中に出てくる残酷な事件は、話のゴールで……最後ね、ゴールで主人公が幸せを獲得するための、途中の試練として起きるといふふうに言えます。これは確実に言えます。昔話の中の残酷な事件は、主人公が話のゴールで幸福に至るための途中の試練として起きると言えます。

じゃあ、その最後のゴールでの幸せは何かっていうの。これ、かなり僕は広く調べました……世界的なレベルで調べたんですけど。ほとんどの昔話は、主人公が最後にゴールで幸せになるっていうのは、一つは身の安全。主人公の身の安全。竜をやっつけたとか、やまんばをやっつけたっていう、身の安全。それから、富の獲得。

そして、結婚。この三つです。この三つのどれかに当てはまります。

お話を聞いている子どもの大抵は、自分を主人公だと思って聞いてます。そうでしょう。皆さんも子どものころ、主人公になったつもりで話を聞いてたと思う。そういう子どもにとって、主人公が最後に幸せになればオーケーなんです。最後に幸せになれば万歳なんです。めでたしなんです。途中で怖いことがいっぱいあっても、最後に幸せになればいい。そういうふうになってます。ほとんどの昔話がそういうふうにできてるんですね。

今の残酷の問題としてもう一つ、初めに聞いておいてもらいたいのは、それは、昔話っていうのは、同じ場面が出てきたら同じ言葉で語るという、大きな法則を持っています。文法です。同じ場面が出てきたら、同じ言葉で語る。これはもう簡単ですよ。大人になって、同じことを同じ言葉で2度3度言ってもらえばわかりやすいから、それはそれでいいでしょう。それが、昔話の場合には、同じことが3回起きることがとても多いんです。昔話は3回の出来事をほとんど同じ言葉で語ると言えます。3回の出来事をほとんど同じ言葉で語る。

その代表的なのは『グリム童話』の「白雪姫」なんです。白雪姫は3回殺されたんですが、知ってますか。どうだろうか、皆さん。自分が知ってる「白雪姫」を思い出してみてください。白雪姫は3回殺されてます。もし、リンゴで殺されただけだと思ってる方がいたら、それはディズニーにだまされてるんです。ディズニーは1回に仕上げました。そうじゃありません。オリジナルを読んでみてください。全訳で読んでみてください。『グリム童話』の全訳なんていくらでも出てますから、必ず図書館にありますから、読んでみてください。とても見事な物語です。3回、ほとんど同じことが出てきます。

じゃ、もう一つ、「シンデレラ」。シンデレラの話は、シンデレラがガラスの靴を置いてきたのは3回めの舞踏会の帰りだっていうのを知ってましたか。どうだろうか。皆さん、自分が知ってるシンデレラを思い出してみてください。もし1回めの舞踏会で置いてきたら、これもディズニーにだまされてるんです。ディズニーは作り変えてしまいました、残念ながら。

3回がとても大事なんです。今日はその話に入っていきます。「白雪姫」、こういう話なんですよ。女王は白雪姫を殺そうと思いました。そして、狩人に「この子を殺せ」と言って渡すんですね。ところが、狩人は、かわいい子なもんだから殺すことができなくて、逃がしちゃうんです。白雪姫は1人で逃げてって、小人の家にかくまわれて暮らしてます。女王は、もう殺したつもりでいたんだけど、あるとき

鏡に「鏡よ鏡、この国で一番美しいのは誰か」って聞いたら、鏡は「女王様、この国ではあなたが一番美しい。けれども、白雪姫はあなたより千倍も美しい」というふうに言うんです。で、まだ生きてることがわかって、殺しに行きます。

まず1度めは、行商人に変装して、きれいなひもを作って売りつけに行きます。で、白雪姫に売りつけて、「じゃあ、あんたの胸を飾ってやるよ」と言って、胸をひもでがっつと締めたんです。と、ぱったり倒れるんです。窒息死したみたいですよ。で、女王は帰っちゃいました。夕方、小人たちが山から帰ってきたら、白雪姫が倒れていた。体中を探ってみたら、胸がひもで締められていた。そのひもを切ってやったら、ぱあっと生き返ったんです。窒息死してなかったという話ですよ。それで、小人たちは言います。「その行商人はおまえの悪い継母に違いないから、もう買っちゃいけない」と言いながら、みんな行っちゃうんですね。翌日、全部、行っちゃいました。

白雪姫は1人残りました。そこへ女王が、きれいなくしを作って売りつけにきます。1人で来ます。1対1になりますからね。昔話の場面っていうのは、さっき言ったようにシンプルでクリアですから、1対1の場面がとても好きなんです。1対1の場面。きれいな毒のくしなんですよ。白雪姫はそれを見せられると、つい買っちゃいました。すると、女王は「じゃあ、あんたの髪をすいてやるよ」と言って、髪の毛にくしを立てた。その途端にぱったり倒れたんですよ。毒が効いたみたいですよ。で、女王は帰っちゃいました。小人たち、夕方また山の仕事から帰ってきたら、また白雪姫が倒れていた。よく見たら、髪の毛にくしが刺さっていた。そのくしを抜いてやったら、ぱあっと生き返ったっていうんですよ。毒が効いてなかったっていう話ですよ。これ。それで、小人たちはまた言います。「もう絶対買っちゃいけない」と言うんですが、翌日また、みんな出かけちゃうんですね。

すると、白雪姫は1人残りました。そこへ女王がまた1人で来ました。1対1です。そして、最後がリンゴです。これは知ってるでしょう。リンゴが半分だけ赤くて、そこにだけ毒が入っている。そういうリンゴを持って売りつける。白雪姫は知らないで、その赤い方を食べちゃった。そしたらぱったり倒れたんです。で、女王は帰っちゃいました。小人たちが山から戻ってきたら、また倒れていた。体中探ってみたけれども、何も見つかりません。白雪姫は生き返りませんでした。けれども、その死に顔がまるで生きてるように美しいので、小人たちは彼女を黒い土の中に埋める気にはならず、ガラスの棺を作らせて、そこに寝かせました。そして、その棺を山の上に安置して、7人が交代で見張りをしながら泣いていました。幾日もたち

ました。ある日のこと、王子が通りかかって、その美しい死に顔を見て愛を感じて、小人たちからその遺体をもらい受けます。ガラスの棺ごともらい受けて、召し使いがその棺を担いで山を下っていくときに、木の切り株に足をひっかけて、ガタンと揺れました。揺れた途端に、喉にひっかかっていた毒のリンゴがぼろっと外れたっというんです。そうしたら生き返ったんです。これがオリジナル。で、宮殿に帰って結婚しましたと。こういう話です。

ぜひ、全訳で読んでみてください。おもしろいですよ。ディズニーは、恐らく喉からリンゴが外れて生き返ったっていうのが余りにもばからしいと思ったんだろうね。それで作り変えちゃったんです。知ってるでしょ。王子のキスによってって、やったわけですね。「王子のキスによって」って、いかにもロマンチックみただけで、陳腐じゃないですか。誰だって思いつきそうな話だよ。喉からリンゴが外れた」の方が、はるかに昔話的です、これは。それはすばらしかったんです。ディズニーはそれがわかんなかったの。だから作り変えちゃった。とても残念です。

しかも、ディズニーは3回を1回にしちゃったわけ。リンゴだけにしちゃった。あの3回は、実はリズムなんです。1回め、ひも。2度め、くし。3度め、リンゴ。で、リンゴのところが一番長いんです。生き返ったりしてますからね。つまり、3回繰り返して、3回めが一番長くて、一番重要である。そういう形になってます。重要っていう意味は、リンゴで生き返らなかったでしょ。だから、結婚できたんだよ。ですから、3回めが一番重要です。ってことは、リズムがあるよね、そこに。こういうリズムです、簡単に言えば。タン、タン、タンって、こういうリズムです。3回めにアクセントがあるんです。そういうリズムです。これは、だから、お話のリズムなんです。壊すわけにいかないんです。

僕はこれが「あ、リズムだな」っていうことが気がついたとき、僕の中ではすぐ陸上競技の三段跳びと結びつきました。どうだろうか。陸上競技、思い出してみてください。「ホップ」「ステップ」「ジャンプ」って飛ぶでしょ。あのとき、ジャンプが一番長いんじゃないですか。で、一番重要でしょ。そこで勝負するんだから。そうだよ。すると、3回めが一番長くて、一番重要です。「白雪姫」と同じじゃないか。「白雪姫」と同じです、形は。

そればかりか、僕の中では音楽と結びついたんです。音楽にもこれと同じ形があるっていうことに気がつきました。音楽では、バーフォームっていうんですけど、「2小節・2小節・4小節」……こういうメロディーの作り方があります。音楽する人はいっぱいいると思うんで、思い出してみてください。これは、いわゆるポッ

プミュージックにも使われてる。クラシックはもちろん、演歌にも使われているし、よく使われてる形です。2，2，4という形です。2小節，2小節，4小節，あるいは2拍，2拍，4拍。っていうことは、最後が4なんです。一番そこが重要なんですね。

有名な例で言うと、シューベルトの子守歌といたら皆さんご存じでしょう。「眠れ，眠れ，母の胸に」，こういうふうだよ。眠れ」って2ですね，これ。同じメロディーを2度下げて「眠れ」って繰り返します。今度は4つ一息です。「母の胸に」っていうことですね。4つ一息で，一番長いです。それで，歌うときにどこを一番強く歌うかっていうと，必ず『母の胸に』を一番強く歌え」と必ず言われます。これは音楽のやり方を思い出してください。3回めのそれが一番強く演奏するでしょ。昔話と音楽は同じなんです，本当は。僕が言いたいのは，シューベルトの子守歌を歌う人が「3回めが一番大事なんですね。それじゃあ，1回めと2回めを省略しましょう」って，誰も言わないでしょ。そうでしょ。陸上競技の三段跳びの選手が「ホップ，ステップ，ジャンプ。ジャンプが一番大事なんですね。じゃあ，私はホップ，ステップはカットします」って誰も言わないでしょ。それじゃ飛べないんだもん，そもそも，そんなに。

だけど，白雪姫に関しては，最初のひもで殺されたのと，くしで殺されたのがカットされて，リンゴだけになってるんです。おかしいと思いませんか。だから，僕はさっき激しい言葉で言ったの。「だまされてるんだ」と言ったんです。どうぞ，そういうリズムなんだということを思ってください。ですから，3回とも省略することはできないんです。1と2は省略できないということだと思ってください。

昔話って，皆さん，どういうふうに受け取ったか知らないけれども，今日，最初にお話ししたように，耳で聞かれてきました。耳で聞かれるためには，そういうリズムの快感が必要なんです。リズムの快感。でれでれ，でれでれとしゃべっちゃだめね。そういうものを，昔話はちゃんとできていますよね。長い間傳承されてる間に，いつの間にかできてるので，それを壊さないでくれよと僕は言ってるわけです。「シンデレラ」も，ガラスの靴を置いてきたのは3回めなんです。そのことは後でお話ししますね。昔話が語る若者の姿のところでお話ししますが。

そういうわけで，ここから本題に入るわけですけども，昔話っていうのは，皆さん，子どもだましのお話と思ってるかもしれないけども，実はいろんなメッセージを発信している。形も，今言ったように，非常に整ってます。形も，いいかげんじゃありません。ちゃんと文法があります。と同時に，内容もしっかりした内容を持

ってるんです。そのことを聞いてもらいたいと思って来たんですけどね、今日。

例えば、こういう話があります。日本の話です。ある村に1人の怠け者がいた。若い者がいて、ちっとも働かないと、みんなからばかにされて、「あいつは怠け者だ」「役立たずだ」「寝太郎だ」といって、ばかにされていた。そうやって何年も過ぎたある日のこと、むっくり起き上がって町へ出かけて行って、ハトとちょうちんを買って帰ってきた。夜になると、そのハトとちょうちんを持って、隣の長者の家の松の木によじ登って、大声で叫んだ。「長者よ、よく聞け。われこそは鎮守の森の神様である。今夜はおまえの家の家運を予言しに来た」って言うんです。家の運、家運を予言しに来たと。長者は、夜中にいきなり大きな声が聞こえたんで、何事かと思って縁側に出てみたら、真っ暗闇から声だけ聞こえてきた。「おまえの家の一人娘に隣の寝太郎をむこに取らなければ、おまえの家の家運はたちまち傾くであろう。よいか、わかったか。では、予は鎮守の森に帰るぞ」と言って、寝太郎はちょうちんに火をつけて、ハトの足に結びつけて、ぱっと放した。帰るぞと言った途端に火がしゅっと鎮守の森の方へ飛んでいったもので、長者は本気にしてしまった。翌朝起きると、一番に寝太郎のところへ行行ったというんです。寝太郎はまだ寝てた。たたき起こして、「寝てる場合じゃあねえ。鎮守の森の神様のご命令だから、ぜひ、うちのむこになってくれ」っていうもので、「じゃあ、しゃあねえな、行ってやるか」と言って、寝太郎が長者の家のむこになったっていう話なんです。

これ、真面目に聞かないでくださいね、こういう話は。笑い話ですから。とんでもない話ですよ。大人がこういうのを読むと、これって、人をだましてるから悪い話だというふうを考えちゃうんですけど、でも、昔話って、案外、道徳を気にしていません。うそをついて幸せになる話なんて、いくらでもあります。昔話が言いたいのは、それよりも「強く生きろ」なんですよね。強く生きること。それをとても重んじてます、昔話は。

だから、今の場合も、悪知恵ですけれども、その悪を括弧に入れてみてください。悪知恵も知恵のうちとを考えてみてください。そうすると、メッセージが読み取れると思うんだ。悪知恵も知恵のうちと考えると、こうなるでしょ。二つのメッセージがあると思うのね。一つは、あの寝太郎は一生寝ていたわけではない。途中で起きたっていうんです。そうでしょ。あるとき知恵を出してるんですから、途中で起きたと言えますよね。それからもう一つは、あの寝太郎は初めのうちたっぷり寝たからこそ、後でいい知恵が出せたんだっていう。どうでしょうか、この二つ。

まず、たっぷり寝たから後でいい知恵が出せたんだっていうのは、よくわかりま

すよね。眠いときはいい知恵が出ませんよ、誰だって。だから、たっぷり寝といてよかったなっていう話よね。第1のメッセージの方はどうでしょうか。あの寝太郎は一生寝ていたわけではない、途中で起きたというメッセージ。これ、皆さん、学校時代のことを考えてください。学校に今いる学生たち……今日はたくさん学生たちがいるわけだけど、どうでしょうか。教室へ入ると眠くなるなんていうのは、みんな経験してませんか。先生の目をちょっとかすめてサボったとか、親の目をちょっとかすめて何か悪いことをしたって、みんなやってるよね。僕も長いこと教師してましたから、そういうのはいっぱい知ってます。寝てた学生、たくさんつき合ってきました。でも、そういう学生が30歳・40歳になって寝てるかっていうと、寝てないんだよね。みんな一人前に社会で働いてます。それは、僕の言い方で言えば、「起きた」。どこかで起きた。若者は寝てることがあるんだけども、どこかで起きる。そここのところが僕は大事だと思います。

僕は、定年で大学をやめてから何年もたつんですけれども、よく「卒業20年だから来てくれ」とか「卒業30年だから来てくれ」なんていって、行くんですが、行くと、かつて寝てたような学生が、みんな今、ちゃんと社会で動いてるわけです。僕はすごくそれがうれしい。うれしいと思うんです。ですから、「君はどこかで起きたんだな」というのはよく言うんですが、教師として一番うれしいときなんです。

でも、どうでしょうかね、僕がちょっと、今、気になるのは、どうも日本では今、非常に効率的に勉強することがいいことになってて、小学生のころから余り寝させてもらってない子が多いんじゃないか。それが僕は気になります。思春期っていうのは、別の言葉で言えば、眠い時期なんだよね。体がどんどん成長しますから、当然眠いわけで……。その眠い時期に、やっぱり眠った方がいいんじゃないかというふうに僕は考えてるんですが、どうでしょうかね。そうでないと、そのときに無理していると、今度は逆に、社会に出てからくたびれちゃって、眠くなったりする。これは大変だよ。40歳になって「眠くなった」なんていったら大変ですよ。ですから、僕は、今の寝太郎の話はとてもいい話だなと思っているんですよ。僕の周囲にそういう若者がいっぱいいたから。だけど、今、みんな起きて働いてます。ちゃんと起きて働いてます。今日は学生諸君がたくさんいるから、恐らく今、眠くしょうがない学生ってたくさんいると思うんだけど、必ず起きます。どこかで。いつか起きます。

それともう一つ、「わらしべ長者」という話があるんですけどね。日本の話です。こういう話なんです。ある村に、大きな百姓がいた。息子が3人おった。自分が年

を取って財産分けをするときに、3人を呼んで言った。長男には「おまえは頭がいいから、金の財産を全部譲る」、次男には「おまえは働き者だから、田畑を全部譲る」、末っ子には「おまえはちっとも役に立たない子だから、これしかやるものはない」と言って、わらしべ1本しか与えなかった。そしたら、その末っ子はわらしべ1本もらって、もう家にいてもしょうがないので、とぼとぼと旅に出た。歩いていったら、ハスの葉っぱを収穫してるおじさんがいて、「とてもいいハスが採れたんだけど、このハスをくくるわらがあるといいんだがな」とひとり言を言っていた。「おじさん、このわら上げるよ」と言って、上げちゃった。そしたら、そのおじさん、ハスの葉っぱをわらでくくって、お礼にハスの葉っぱを1枚くれた。

今度は、その葉っぱを1枚持って、とぼとぼと歩いていった。そしたら、みそを作ってるおじさんがいて、「とてもいいみそができたんだけど、このみそを包むハスの葉っぱがあるといいんだがな」と言ってるから、そのハスの葉っぱを上げちゃった。そしたら、お礼にみそをくれた。

今度は、みそをもらって、とぼとぼ歩いていったら、刀鍛冶がいて、「とてもいい刀が打てたんだけど、この刀を最後にみそで仕上げると名刀が仕上がるんだがな」とひとり言を言ってるわけから、「おじさん、これ上げるよ」と言って、みそを上げちゃった。そしたら、その刀鍛冶、刀をみそで冷やして名刀を仕上げた。そして、お礼にその名刀をくれたっていうんですね。そしたら、何のために作ったんだかわかんないんだけどね、くれたと。

その刀を持って歩いていったら、川の土手に出た。くたびれたもんで、刀を脇に置いて昼寝をした。そこへ山犬があらわれて、飛びかかろうと思って、周りをぐるぐる回り出した。それを川向こうで村の長者が見ていて、危ないと思った瞬間に、刀がひとりでにさやから飛び出して、山犬に切りかかった。山犬は逃げていった。それを見て長者は「あの刀はただの刀ではない。あんな刀を授かっている若者にはただ者でない運が授かっているに違いない」と思って、若者のところへ行った。そして起こして、自分が今見たことを話して聞かせた。「おまえにはただ者でない運が授かっているようだから、ぜひ、うちの一人娘のむこになってくれ」と言うもんで、とうとう末っ子が長者の家のむこになったっていう話なんです。

長者の家のむこになるのが、いいことかどうかわかりませんよ。意外としがらみがあって大変だろうと思ってるけど。まあ、日本の昔話の終わりのパターンなんですけどね。これを聞いたとき、僕はこれはわかりやすかったですね。聞いてすぐ「あ、この昔話、子どもの成長を語ってるな」と思いましたから。どうだろうか。今の話

をちょっと抽象化して、子どもは自分が獲得して持っているものと、ちょうど合致するものと出会ったとき、次の段階を有効に進むことができる。こういうふうに言い直すことができるでしょう。自分が獲得して持っているものと、ちょうど合致するものと出会ったとき、次の段階が有効になるっていうふうに言えるよね。わらしべを持っているときに、ハスの葉っぱのおじさんと出会ったからよかったんだよね。あれ、いきなり鍛冶屋と出会っても、何にもなんなかった。そうでしょ。自分が獲得して持っているものとちょうど合致するものと出会ったときに初めて次が有効になる。というふうに言い直したら、これはもう子どもの成長、あるいは若者の成長を語ってるんじゃないですか、ずばり。どうだろうか。

例えば、うんと単純に言うとな、子どもの場合。もう3歳ぐらいだから、三輪車を買ってやった。だけど、ちょっと早いと、せつかく買っても乗らないでしょ。無理に座らせたって、泣いちゃうよね。あれは、子どもは動物ですから……人間って動物ですから、自分ができると、できないことを知ってたよ。だから、まだ握る力がないとか、バランス感覚がないと、泣いて拒否して自分を守るわけよね。そんな子どもも、ほったらかしといたって、何週間か何カ月かたったら、自然に乗ってるね。それは、自分が肉体的にできるようになったから乗っていくわけです。すると、さっきの話とぴたりと合うでしょ。自分が獲得して持っているものとちょうど合致するものと出会ったとき、次の段階が有効になるって言えるよね。だから、これはもう明らかに子どもの成長を語ってる。

今、僕は「3歳の」というような例を出したけど、これは何歳でも僕は同じだと思ふ。大学生の年齢でも同じだと思ふ。そうじゃないかな。例えば、何でもいいですけど、「モーツァルトの音楽ってすごいよ。いいよ」なんて、人に言われても、自分がその気になってなきゃ、ちっともよくないでしょ。「誰そのジャズの演奏、すばらしいぜ」って言われても、自分が心がそこまで行ってないと、聞いても何にもおもしろくないよね。そうでしょ。全部同じです、大人の場合も。僕は全く同じだと思ふ。「日本のお茶ってすごくいいですよ」「茶道はいいですよ」って言われたって、自分がそこまで関心が行ってなかったら、何にもおもしろくないよね。同じです。昔話って、不思議にこういうふうに、人間の成長するプロセスをととも見事に語っているんですよ。そういうものをきちっと読み取っていけば、昔話からたくさんメッセージが読み取れると、僕は思っているんです。

もう一つ聞いていただきますけど、それは「シンデレラ」の話です。さっき僕はシンデレラっていうのは3回舞踏会へ行ったというふうに言いましたけど、『グリム

童話』を読んでみてください。『グリム童話』の21番「灰かぶり」というのがあります。ぜひ読んでください、これは。ディズニーの「シンデレラ」の絵本を読んで「シンデレラ」の話を知った気にならないでください。あれは全く壊しちゃってますから。『グリム童話』21番「灰かぶり」……「シンデレラ」っていうのは「灰かぶり」っていう意味なんです。主人公が灰の中で寝させられるもので、灰まみれになるんです。それを英語であだ名としてシンデレラと叫ぶわけなんです。フランス語でサンドリヨンっていうふうにいるんですよね。あだ名です、あれは。

グリムの場合はこんな話です。昔、1人の娘が親に死なれて、継母に育てられています。継母にも実の娘が2人いて、その3人はきれいに着飾って遊んでばかりいます。シンデレラばかり汚い服を着せられて、寝るときには灰の中で寝させられるもんだから、灰まみれになりました。それでシンデレラというあだ名がついたんですね。灰まみれっていうあだ名がついたんです。

ある日のこと、宮殿で王子の花嫁を選ぶための舞踏会が開かれることになる。継母と実の娘2人はきれいに着飾って出かけようとしています。シンデレラも「連れてってもらいたい」ってお母さんに言うんだけど、継母は「あんたにはきれいな服がないから、連れてってやらない。それにダンスもできないじゃないか」って言って、置いてかれちゃうんです。彼女はどうしても行きたくて、みんなが出かけた後、実の母のお墓へ行きます。すると、そこにハシバミの木が生えていて、そこに白い鳥が飛んできます。そして、その白い鳥が、きれいな服を落としてくれるんです。彼女はその服を着ると、見違えるように美しいお姫様の姿になります。そして宮殿へ行きます。宮殿では王子が、どこかの見知らぬ美しいお姫様があらわれたので、すっかり首ったけになって、もう他の誰とも踊ろうとしません。そして、「この人は僕のパートナーだ」と言って、実質、プロポーズしてるんです。ところが、夜、ある時間になると、なぜか王子の腕の中から、すっとすり抜けて帰ってきてしまいます。そしてまた汚い服に着がえます。そして灰の中に寝てるんです。すると、夜遅くなって、継母とその実の娘2人が舞踏会から帰ってきます。そして、話すんです。今日はどこかの見知らぬきれいなお姫様があらわれて、王子様はその方に首ったけだったのよっていう話をするんですね。シンデレラはまるで人ごとのように「ああ、そう」って聞き流してるんです。

2回め。また置いていかれました。また実の母のお墓へ行く。すると、そこに白い鳥が飛んできて、今までよりもっと美しい服を落としてくれた。彼女はそれを着ると、今までよりもっと美しいお姫様になって、そして宮殿へ行きます。宮殿では

王子は、こないだ逃げられたお姫様がまたあらわれたので、喜んで、今度こそどこの誰だか確かめようと思うんですが、また逃げられてしまうんです。で、シンデレラはまた逃げ帰って、灰の中に寝ています。

3回め。また置いていかれます。シンデレラはまた実の母のお墓へ行く。すると、白い鳥が今までよりもっと美しい服を落としてくれた。彼女はそれを着ると、今までよりもっと美しいお姫様になった。そして宮殿へ行きます。宮殿では王子が、こないだ2度も逃げられたお姫様がまたあらわれたので、今度こそどこの誰だか確かめようと思って、階段にタールを塗っておいたというんです。あの黒いべとべとしたタールですね。タールを塗っておいた。で、シンデレラは逃げ帰るときに、そのタールに左靴をひっかけて、置いてきてしまった。王子はその残された靴を頼りに、その靴にぴたっと足の合う娘を探して、結局シンデレラを見つけて結婚したと。こういう話です。

ディズニーの話と全く違うでしょ。この話は元々は中国の話なんです。9世紀の中国の物語にヨウゲンという娘の名前で出てくるんですが、ヨウってというのは葉っぱの葉、それからゲンは限度の限、限るという字ですね。葉限という娘の名前で出てくる話がありまして、それがもとなんです。それが東と西に流れたんでしょうね。日本にも流れてきた。ヨーロッパにももちろん流れていったわけですけども、世界中の話になってます。で、葉限の話の場合も、お母さんがずっと葉限についていて助けるんです。母の力で助かるんです。今の話もそうでしょ。実の母のお墓へ行ってます。そしたら、そこへ白い鳥が飛んできてます。実の母の力で救われてるんです。

ディズニーの方のは、シャルル・ペローという人がフランスにいたんです。フランスの作家なんですけど、17世紀の終わりにシャルル・ペローという人がいまして、その人が今のを作り直したんです。それでカボチャの馬車とか、あんなのが入っちゃったんです。17世紀のフランスっていうことは、18世紀終わりにはフランス革命が起きるわけでしょ。そうすると、フランスのルイ王朝……絶対王朝の一番盛んな時期です。そのころ、とても華やかな文学がとてもたくさん生まれるんです。妖精とか魔女とか王女とか、そういうのがとても好きな時代なんです。そういうものがたくさん生まれました。その時代の流れの中で、シャルル・ペローが今のシンデレラの話の加工して作ったわけよね。それをディズニーが受け取って、さらにああいふふうに派手にしたわけです。ですから、葉限の話からすると、随分変わっちゃってます。どっちかっていうと、中国の話に近いのはグリムの方です。グリムの方が

葉限の話に近い。母親っていうのが出てくるからね。そこが違うんです。

今の話、これはぜひ『グリム童話』全訳で読んでみてください。とても見事な物語です。何回も読み、その3回の繰り返しをほとんど同じ言葉で書いてます、グリムは。3回めが一番長いでしょ。そこはもちろん多少違ってくるんですけど、3回めが一番長いんです。だから、リズムとしてはさっきの「白雪姫」のリズムと同じです。タン、タン、タンッて、こういうリズム。同じリズムになってます。ぜひ読んでみてください。

今の話は、「同じ言葉で繰り返してますよ」「そして3回の繰り返しですよ」と、それで説明終わりでもいいんです。「シンデレラ」の話はこれで説明終わりと言ってもいいんですが、僕はどうしてもひっかかったことがあるんです。それはこういうことなんです。考えてみれば、シンデレラは、結局は王子のプロポーズを受けて結婚してんだよね。だったら、1回めのプロポーズ受けちゃえばよかったじゃないですか。そしたら、話は短くて済むよね。覚えるのも楽だしね。それを、帰ってきちゃうわけです。で、汚い服に着がえて、「私はもう労働者階級がいいわ。あんな宮殿なんて行くの嫌よ」って言うかっていったら、そうでもないんだよね。またきれいな服もらっちゃあ行っちゃうわけです。で、王子が見初めて言うと、また逃げていくんだ。趣味が悪いんじゃないかっていう説もあるんだけどね。いろんなことが考えられるね。

そんなので行ったり来たり。シンデレラはなぜ、行ったり来たりしたんだろうか。王子はシンデレラの美しい姿にほれたんだから、「あんな、きれいだね」って言ってプロポーズしてるんだから、受けちゃえばよかったじゃないですか。それなのに戻ってきちゃったわけだ。あの行ったり来たりは何だったんだっていう問題ですね。これは難しかったです、僕には。何年も考えてました。

あるとき、ふと気がついたのは「あ、これも思春期の若者の行動を語ってんじゃないか」って問題です。どうでしょうか。今話を、「シンデレラ」っていう名前をやめて抽象化してみたらわかりやすい。骨組みだけにしたら。こういうふうになるでしょ。若者は、ふだんは汚い姿で暮らしている。これは服が汚れてるとか、そんな意味じゃなくて、割と反社会的なことをするね。悪いことをする。先生に心配かける、親に心配かける、そういう悪いことをする。いわゆる世間で言う、悪いことをする。そうやって暮らしてる。それをダーティーな姿と言いましょ。汚い姿で暮らしてる。だけど、どんな汚い姿で暮らしてる子も時々、自分の本当の美しい姿になりたいと思うんだよ。なったら必ず、誰かに認められたいと思うんだよ。とこ

ろが、認められると、なぜか知らないけど、またダーティーな方へしゅっと戻っちゃう。じゃあ、それきりダーティーにいて、もう美しい姿にならないかっていうと、そうではなくて、またしばらくすると美しい姿になって「認めてくれ」って言う。認めてやると、またしゃあっと逃げていっちゃう。この行ったり来たりであるっていうふうに言い直したら、どうだろうか。こういうふうに言い直したら、これはもう思春期の行動そのものだし、シンデレラのあの物語にぴたっと合うんじゃないですか。どうだろうか。

若者はね、親から何か言われたり、あるいは先生から責められるとか、いろんなことがあるでしょう。反社会的なこともするかもしれない。でも、僕は確信を持ってるんですけど、どんな子でも必ず、時々自分の美しい姿になりたいと思う。で、美しい姿になったら、必ず誰かに認めてもらいたいと思う。一番認めてもらいたいのは、もちろん親だろうね。もちろん親でしょう。その次って言うのも変だけど、親以外と言えば、先生だね、やっぱり。どうも先生です。この先生っていう意味は、小学校・中学校から大学……あるいは大学卒業してからでもいいんですけど、とにかくその人にとって先生と名のつく人、立場の人に認めてもらいたい。それから、おじいちゃん、おばあちゃんに認めてもらいたい。若者は、ふだんダーティーな姿をしていても必ず、時々、自分の美しい姿になりたい、美しい姿になったら認めてもらいたい。で、認めてもらって。シンデレラの場合は宮殿に行きました。よかったですね、王子が認めてくれたから。認めてくれて、それで、「じゃあ結婚しましょう」ってなるかっていうと、ならないんだよね。また逃げ帰ってきてしまう。実社会での若者の姿もそうじゃないですか。どうでしょうか。1度、すうっといい姿になって、親や先生が安心して、何かまたやらかしちゃう。何かまたやってしまう。っていうことは、ダーティーな方へ行っちゃう。じゃあ、それきりもうダーティーの方にばかりいるかっていうと、そうじゃなくて、時々またすうっと素直な美しい姿になっていく。で、「美しいね」って言ってやると、しゃあっとまた逃げていく。この行ったり来たりであるっていうふうに言い直したら、どうでしょうね。

僕はよく……僕も大学の教師を長くしてたもんですから、学部長なんかやってるときに随分いろんな相談を受けました。もちろん若者自身からも相談を受けたし、若者の親たちからも相談を受けました。そういうとき、例えば息子が、ふだんはとも親に心配かけてる子が時々いい姿になって、親がほっとしたというようなとき、親が言うんですよね。「もうだまされたくないんですよ」「もう裏切ってもらいたくないんですよ」っておっしゃるんです。僕はそのときに「冷たいようだけど、それ

ははかない夢ですよ」と言ったのね。つまり、裏切ろうと思ってるんじゃないか。若者の方は裏切ろうと思って裏切ってるんじゃないかと、あれは振り子が振れてるみたいに、向こうへ行っちゃうですよ、自動的に。自動的に行っちゃうんです。でも、「振り子のように行っちゃうんだから、振り子のようにまた戻ってくるから、帰って待っててやってください」と僕はよく言った。「待っててやってください」というふうに僕は言いましたね。僕は、それは「シンデレラの振り子」って名づけていいんじゃないかと思うんだ。「シンデレラの振り子」って名づけていい。

どうだろうか。若者が、ふだんいろいろ社会的に非難されるようなことをやっても、必ず時々きれいな姿になるんです。そのときそれを大人の方は必ず認めてやってもらいたいと思うし。でも、認めたからといって、翌日からずっといい子が続くという、そうではないということも、大人の方は知ってなきゃいけないと思うんだよね。でも、振り子だから、いつかおさまってくるんですよ。「必ずおさまりますよ」って僕は言ってたんです。「だから、待っててください」と。そういうふうに学校へ来て、先生に息子のことで相談するっていうのは女親が多いんですけども、お母さんに対して「お母さん自身が何か熱中するものを持ってください」と、僕はよく言ったんです。「何か熱中するものを持ってください」。子どもにしがみついでいくんじゃないかとね。何でもいいよ。花づくりでもいいし、山登りでもいいし、コーラスでもいいし、映画の勉強でもいいし、文学の勉強でもいい。何か熱中するもの。テレビに熱中なんていうのは論外ね。あるいは外食に熱中とか。そういう退廃的な熱中じゃなくてね。「何か自分がちょっと努力する熱中、そういうものを持ってください」というふうに僕は言いました。特に女親が多かったからね。そして、「子どもに向かっては、『あんた、もう18歳なんですよ。自分の人生、自分で責任持ってよ。私の人生なんて1回っきゃないんだから、私、ちゃんとやりたいよ』と言う権利はあるんじゃないですか」と言って、けしかけたりしたけどね。全て捧げるんじゃないかとね。「あんたは自分の人生やってください。私は自分の人生をちゃんとやる」と。その方が僕はいいというふうに思っているんですね。

でも、時々かわいいお母さんもいらして、「私は今、息子がああいう状態なものですから、私の全てを子どものために捧げてるんです」なんておっしゃるんです。で、僕は「それは最悪ですよ」と言ったの。つまり、若者が、必ず誰でも悩むことなんだよ、これは。動物は必ず親から離れなきゃいけないからね。若者は知ってるわけ、動物として、親から離れなきゃならないことを。だけど、親のもとにいた方が楽なんだし、安心だからっていうのもあるわけ。ですから、矛盾してるわけです。なの

で、があつと揺れるでしょ。それで悩みが起きるわけです。ほとんどそういう問題です。そのときに親の方が抱きついていったら、もう大変だよ、それは。僕はそれ、とても危険だと思う。二つの意味で。一つは、抱きつかれちゃってる若者の方は、それでも親が嫌になって、親と絶縁しちゃうみたいな、親と子どもの間が完全に切れちゃう、その危険。それからもう一つは、逆に今度は親に完全に息子なり娘が取り込まれちゃって、社会の中でちゃんとやっていける独立性みたいなものも身につかない、そういう人生になっちゃう。両方とも危険だよ。

だから、それはかわいい、本当に優しいお母さんだとは思うんだけど、僕は冷たいみたいに、でも、厳しく言いました、それは。抱きついていくのが一番危険だと、それはね。「お母さんはお母さんの人生をやってください」というふうに僕は言いました。でも、あるところで僕がこの講演をしたら、やっぱり若い学生から質問が出ましてね。恐らく彼はそういう状態だったんだろうな。お母さんに抱きつかれてるような状態だったんだろうと思うんだけど、僕に真面目に質問なされた、それは。「親がそういうふうに抱きついてくるときに、子どもの方はどうしたらいいんでしょうかね」という質問だった。とても切実な質問だと僕は思った。で、僕が答えたのは、「はっきり言いなさい、親に対して」。親は恐らく、子どもが離れていくことが寂しいんですよ。で、抱きついてきてるのね。自分のところにとどめたいわけよね。「自分を捨てていくんじゃないか」という心配……極端な言い方をすればだよ。極端な言い方、「捨てていくんじゃないか」という心配をしてるの。だから、そうじゃないと。自分は、お母さんならお母さんを、捨てていこうなんていうのは全く思っていない、そうじゃなくて僕は独立した人間になりたいんだということをはっきり言ったらどうですかというふうに僕は言ったんですが、どうでしょうかね。

親はやっぱり不安を持つんですよ、みんな。親が優しいからね。で、子どもに近くにいてもらいたい。いつまでもいてもらいたい。だけど、それはだめなんだよ。子どもだって大人になっていかなきゃいけないわけだから。そのときに何を指すかっていうと、独立した2人の大人。親と、それから娘なり息子なりという、その両方独立した存在、そういう姿を目指した方がいいんだ。どっちかに一緒になるっていうんじゃないでね。ということそのときに親にはっきり言ったらいいというふうに僕は思いました。どうだろうか。彼がその後どういうふう実際に親に言ったか、聞いてないんですけどね。

僕も息子が2人いるんですが、もう大人になっちゃって、親になってますが……。彼らが小さいとき、クリスマスツリーを作ってやろうと思って、モミの木の苗を買

ってきたことがあるんですよ。駅前の植木屋で買ってきて、植えたの。ちょうど僕の勉強机の真っ正面に植えたもんだから、毎日見てたんです。すると、モミの木ってすごく成長が早くて、このくらいの高さになってるの、僕の方から見てね。で、きれいなこういう形になったんですよ。とてもきれいな形になったもので、「あ、これ、クリスマスになったらクリスマスツリーになるな」と思って、楽しみにしてたの。そして、秋に植木屋を入れたら、植木屋が「モミの木っていうのは成長が速過ぎて、まだ根っこがちゃんとしてないから、このままほっとくと、風が来たら倒れちゃいますよ」って言って、上をがごと切られちゃったんですよ。こういうきれいな形だったのが、上の方をびよんと切られたから、こんな変な形になっちゃったんですよ。で、僕はがっかりして、「植木屋のやろう、余計なことをしやがった」と思っていたの。そしたら、何週間かたつと、3週間ぐらいたったのかな、はっと気がついたら、切られてこうなった枝の、僕から見ての左側が、ちょっと上がってきたんです。「あれ？」と思ったら、日に日に上がって行ってね。本当にわかんないんだよ。日に日に明らかに上がって行って。そして、何週間たったのかはつきり覚えてないんですけど、5・6週間後じゃないかな、完全にもとに戻ったんです。完全にもとのきれいな形になったんです。僕は感動しました。感動したね。つまり、モミの木は「俺はこういう形じゃねえよ」と言ってるわけね。「俺の形はこういう形なんだぞ」と主張してるわけよ。自分の姿を主張してるっていうことを思い知らされた。

僕は、植物に意思があるっていうことを知らなかった。でも、哲学の方では、言葉があるんですよ。「形式意思」というんですけどね。「自分はこういう形でありたい」という意思のことです。それを形式意思といいます。哲学の方の言葉としては僕は知ってたんだけど、実際に目の前で植物が形式意思を示してくれたのは初めてだった。本当に衝撃を受けました。後に、植物をやってる友達と出会って、友達にその話をしたら、彼が言うには「そんなの、当たり前えだ。それはDNAよ」って言うんです。それはそうだよ。それはそうでしょう、遺伝子でしょう。だけど、僕は文学をやってる人間ですから、そういう言葉は使わない。そうではなくて、生きているものはみんなそれぞれ形式意思を持っている。「自分はこういう形でありたい」という意思を持っていると言えると思うんだよ。僕は、動物が意思を持っているっていうのは知ってました。犬にしろ、馬にしろね。だけど、まさか植物に意思があるっていうのは知らなかった。でも、考えてみりゃ、あるんだよ。それは、具体的には遺伝子とかそういう形で伝えられるんでしょうけど、きれいな形をちゃ

んと取るんですね。それはすばらしいことだなというふうに僕は思って、本当に忘れられないんですけどね。

でも、考えてみたら、どうだろうか、人間の子どももみんなその形式意思を持ってるんじゃないですか。どうだろうか。人間もみんな、それぞれ形式意思を持って生きてるんじゃないかな。どうだろうか。子どもから大人まで、老人まで全部。こういう姿でありたい。そりゃいろんな人がいるだろうけど、基本的に言えば、この世の中で人間として普通に生きていきたいということね。人間として普通の姿で生きていきたい。でも、普通っていうと、じゃあ、障害者はどうなんだって必ず質問が出ると思う。もちろんそう。だけど、どんな障害があったって、やっぱり人間として生きていきたいと思ってるわけですよ。それがなかったから生きていけないよ。そうでしょ。ですから、その人なりの、みんなそれぞれの形での形式意思を持って生きてるといふふうに言えるんじゃないか。

子どもにも、僕はそれは認めてやっていいんじゃないかというふうに思うんですね。どうもこのごろ見ると、親が子どもの行方を全部決めちゃうような傾向がある。それはいろんな意味ですけどね。進学という具体的なこともあるかもしれないし、職業選択っていう意味もあるかもしれないけども、どうもそういう傾向がある。でも、子どもはそれぞれみんな、自分は社会の中でこういう形で生きたいと思ってるんじゃないか。それで、むしろ大事なことは、大人としては、子どもや若者たちがそれぞれしっかりした形式意思を持って生きられるように育ててやること。それは大事なことになるよね。大人の形式意思を押しつけるのではなくて、若者の方が自分の方で自分の形式意思を考えて、「俺はどういう人間でありたいと思ってるんだろうか」「俺はこの世の中でどういうところで生きようと思ってるんだろうか」っていうことを考えられる子に育てることが大事なんじゃないかと僕は思ってるんですが、どうでしょうか。

昔話っていうのは昔から、おじいちゃんやおばあちゃんが孫に語ったりなんかしてたんですよ、本当に。僕はフィールドワークにたくさん行ってきましたからね。20年ぐらいやってきたから、たくさん見てきたけど、みんなお年寄りです。お年寄りっていうのは何かっていうと、僕も80を超えた年寄りですが、自分の子どもを育てたことはある。だけど、今、その子どもが親をやってんのも見てるわけだよ。っていうことは、自分の子どもが例えばティーンエイジャーのとき、悪くて悪くてしょうがなかったら息子が、今、三十代になって、四十になって、澄ました顔して父親をやってるのを見てる。父ちゃんやってるのを見てる。あるいは、母ちゃん

やってるのを見てる。あるいは、社会に出てちゃんと働いてんのをを見てるっていう経験があるわけでしょ。ですから、子どもへの見方が、昔、老人の見方っていうのは一片じゃないですよ。15歳だけ見てるんじゃないで、15歳の20年後、15歳の30年後の姿も知ってるわけ。つまり、そこに変化がありますよね。必ず変化があるよね。つまり、悪くて悪くてしょうがなかった子が今は真面目に働いてるって、変化だよ、これ。それを見てるから、そういう子ども観。子どもってこうやって変わっていくもんだよ、寝てたっていつか起きるもんだよという子ども観が昔話の中に込められている、だから大事なんだっていうふうに僕は思うんですが、どうでしょうかね。

でもね、人間っておもしろいもんで、自分がティーンエイジャーのときに寝てばかりいたやつも、三十代ぐらいになって起きると、いったん起きちゃうと、自分がかつて寝てたってことを忘れるんですよ。特に、親になると忘れますね、必ず。学校の先生になると、もっと忘れますね。だから、親で学校の先生になったら、100パーセント忘れるという話です。僕も親で教師ですから、自分のことを言ってるんですけども、忘れるんですよ。その忘れるのも無理ないんだよね。だって、もう20年、30年たってんだし。だから、立場が違うよね。風来坊やってるときと、教師なり親なりやってるときって。責任があるよ。違うんだよ。だから、忘れるの。これは無理ないと思う。

でも、気がついた。昔話っていうのは、そうやって個人が忘れてしまったことを日本人全体の記憶として覚えていてくれる、だから大事なんだってことに気がついたんだけど、どうだろうか。昔の話って、日本人みんなが知ってるじゃないですか、そのことを。個人が忘れてしまったことを、昔話は日本人みんなの共有財産として、あるいは「民族の記憶として」と言ってもいいかもしれないね。その方がわかりやすいかもしれない。日本人の民族の記憶として覚えていてくれる。だから大事なんだと僕は思うんです。どうでしょう。みんなそれぞれ一生懸命生きてるわけだから、自分がティーンエイジャーのときにどういうふうだったかっていうのも、それは卒業したら忘れるよ。社会に出たり、結婚したりなんかしたら、忘れていきますよね。そのときそのとき、一生懸命やってるわけだよ。子育ての時期になったら、それを一生懸命。それでいいですよ。だけど、昔話っていうのは、そういう話をみんなが知ってる。みんなが知ってるっていうことは、共有財産。共有の知恵だと思ふのね。もっと単純に言えば、民族としての知恵だと思ふ。「そういうものが昔話にはあちこちに込められてるから大事だよ」と僕は言って歩いているんですが、どうでし

ようか。

なので、僕は、昔話の語り口を壊すことにとても反対です。強く反対です。昔話の語り口……さっきから言ってる文法ね。「3回繰り返し」だとか「腕を切っても血が流れない」とか、「そういう昔話の文法をきちっと守って伝えようよ」と言っ僕は歩いてるんですね。なぜかという、そういう語り口全体の中にメッセージが込められているから。わかるでしょ。今日、3回の繰り返しをやったよね。あの3回の繰り返しだって、壊しちゃえば、もうそれきりですよ。そうでしょ。「シンデレラ」の話をして1回だけにしてごらんないよ。さっきの行ったり来たりっていうメッセージ、なくなっちゃうじゃないですか。そういうことだよ。ですから、語り口が大事なんです。「語り口の中に秘密が込められてるんだから、それを壊さないでくれ」と言っ歩いてるんですが、どうでしょうか。

もし今日、ご関、興味を持ってくださったら、ぜひ「シンデレラ」を読んでみてください。シンデレラっていうか、『グリム童話』21番「灰かぶり」を読んでみてください。それから「白雪姫」……読んでみてください。そして、僕はそういう語り口のことをわかりやすく本にも書きました。『こんにちは、昔話です』という簡単な入門書があります。これは、普通の書店に言っくだされば、手に入ります。『こんにちは、昔話です』、僕の著書です。小澤俊夫著です。出版社は小澤昔ばなし研究所です。僕がやってる研究所ですけどね。そこで出してる本です。普通の書店で手に入ります。

それから、今日お話ししたメッセージの問題は『ろばの子』という本にたくさん書きました。これも僕の研究所で出したものですが、『ろばの子』。グリム童話に「ろばの子」っていう話があるんですよ。それを取りまして『ろばの子』。これも僕の研究所で出した本です。それも読んでいただくと、ありがたい。

それから、もし日本の昔話を余り形を壊してないもので読みたいという気持ちがあるたら、読んでもらいたいのは、福音館書店というところから『日本の昔話』全5巻を出しました。福音館書店っていうのがあるんですね。フクインって、キリスト教の福音館です。『日本の昔話』っていう5冊本です。これは忠実に採話してますので。余計なことは全然入れてません。

もう一つは、小峰書店というところから『語りつぎたい日本の昔話』というシリーズがあります。7巻のシリーズです。これも僕の名前で出ています。

それから、もしグリム童話を読んでくださる、あるいは語ってみようということでありましたら、同じ小峰書店というところから『語るためのグリム童話』って

うのを出しました。7巻本です、これも。

そして、もうやめますけども、今日はこの限られた時間の中でお話を聞いていたいたんですが、もし興味を持ってくださったら、僕はラジオで放送してるんです。FM福岡というローカル放送ですが、今とても便利で、インターネットで検索すると、全部聞けます。バックナンバーを聞けるので、「FM福岡 小澤俊夫」と検索してください。FM福岡です。ローマ字の方がいいと思います。大文字でも小文字でもいいようですけども。すると「昔話へのご招待」という番組が出てきます。300回近くやってるんですけど、バックナンバーが聞けるので、とても便利ですね。グリムのことを詳しく連続でやったり、あるいは今のメッセージの問題もちょっと詳しくやったりしてますので、興味があったら聞いてみてください。

というわけで、時間でやめますけれども、今日聞いていただいて、恐らく皆さんが思ってた昔話と「大分違うな」という感じがあると思うんですが、どうぞ、昔話に少し興味を持たれたら、なるべく本当の形ですね、特に何度も言って悪いんですけど、ディズニーの絵本で『グリム童話』を知った気にならないでください。全訳で読んでください。それがお願いしたいことです。どうも長い時間、ご清聴ありがとうございました。